



可愛いエミリー

モンゴメリ ❧❧❧ 村岡花子訳

新潮文庫

Title: EMILY OF NEW MOON
Author: Lucy Maud Montgomery

かわい
可愛いエミリー

新潮文庫

赤 113 = 13



昭和三十九年三月二十九日 発行
昭和五十九年十二月十五日 三十三刷

訳者 村岡花子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四〇
振替 東京四一八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

ⓧ 印刷・図書印刷株式会社 製本・株式会社大進堂
© Midori Muraoka 1964 Printed in Japan

ISBN4-10-211313-4 C0197

江苏工业学院图书馆

可愛しいエミリー
蔵書章
村岡花子訳



新潮社版

1626

目次

第一章	窪地の家……………	九
第二章	孤独……………	一九
第三章	裏切られた友情……………	三〇
第四章	家族会議……………	四〇
第五章	知恵くらべ……………	五〇
第六章	ニュー・ムーン……………	六〇
第七章	昨日の本……………	七〇
第八章	試練……………	八五
第九章	特別の神意……………	一〇三
第十章	つのりゆく苦しみ……………	一二五

第十一章	イ　　ル　　ゼ……………	一六
第十二章	よもぎが原……………	一六
第十三章	イブのむすめ……………	一九七
第十四章	空　想　の　中　で……………	二〇
第十五章	さまざまの悲劇……………	二九
第十六章	打倒！　ミス・ブラウネル！……………	二二七
第十七章	ありのままの手紙……………	二五
第十八章	カッシデイ神父……………	二七五
第十九章	ふたたび友だちに……………	三〇〇
第二十章	航　空　郵　便……………	三〇六
第二十一章	「ロマンチックだけど、いい気持はしないわ」……………	三三
第二十二章	ウィザーの小別荘……………	三九

第二十三章	幽　靈　屋　敷……………	三五
第二十四章	別　種　の　幸　福……………	三六
第二十五章	そんなはずはない……………	三七
第二十六章	海　　辺　　で……………	三八
第二十七章	エミリーの誓い……………	四〇
第二十八章	夢　を　織　る　人……………	四二
第二十九章	神　聖　冒　瀆……………	四五
第三十章	カーテンが揚ったとき……………	四六
第三十一章	エミリーの決定的瞬間……………	四八

可愛いエミリー

第一章 窪地の家

窪地の家は「どこから行っても一マイル」——メイウツドの人々はこう言っていた。

その家は草深い小さな谷間に立っていて、大きな褐色のきのこのような感じだった。長い緑の小道がその家までのびていたが、樺の若木がこんもりと生いしげっているので、建物は殆んど見えなかった。村は丘のま上にあるのに、その家からはほかの家が一軒も見えなかった。エレン・グリーンは「この家は世界じゅうでいちばんさびしい場所だ」と言い「もしあの子をふびんに思わなかったら、こんなところには一日だっていたくない」と言い言いした。

エミリーは、自分がふびんがられているとは知らなかったし、さびしい、ということの意味もわからなかった。彼女には友だちがおおぜいあった。お父さまのほかに、ねこのマイクとソーシー・ソールがいた。そのうえ、あたりにはいつも風のおばさんがいたし、《アダムとイブ》とか、松の木のおんどりさんとか、やさしい樺の奥さんたちなど、おおぜいの木々がいた。

それにまた、《ひらめき》がいつくるか、エミリーにはわからなかったけれど、それがくるかもしれないと思う気持で、彼女の胸はわくわくし、期待でふくらむのだった。

うすら寒いたそがれどき、エミリーはそっと散歩にでていた。彼女はその散歩のことを、いつまでもはつきりとおぼえていた——そのときの、なにかしら不気味な美しさのせいかもしれない

——それとも、数週間ぶりにやってきた《ひらめき》のためだろうか——いや、それよりも、散歩から帰ってきたあとでおこった出来事のせいかもしれない。

それは五月はじめのどんよりした寒い日で、今にも雨になりそうでいて、降ってはこなかった。父は一日じゅう、居間の寝椅子に横になっていた。ひどく咳がでるので、あまりエミリーに話しかけなかった。そんなことは父にはめずらしいことだった。父はたいてい、両手を頭の下にくんで寝ていた。そして、前庭の二本の大きなえぞ松の木の太枝のあいだから、曇った空が見えるのを、くぼんだ大きな暗青色の目で、夢み心地にぼんやりと見つめているのだった。この二本のえぞ松のことを、エミリーの家の人々は、『《アダムとイブ》』と呼んでいた。それは、この二本の木と、その間にある一本のリンゴの木とのならば具合が、エレン・グリーンの本の中の、古風なさし絵に描かれているアダムとイブと知恵の木のならび具合に、ふしぎなくらい似かよっている。エミリーが気づいたからだ。知恵の木は、ずんぐりしたリンゴの木にそっくりだったし、アダムとイブは二本のえぞ松そっくりに、しっかりと立っていた。

「お父さまは何をを考えていらっしゃるのかしら？」とエミリーは思ったが、父の咳がひどいときには、なにかと問いかけて父をわずらわせないことにしていた。「かわりに誰か話相手になってくれる人がほしいな」とエミリーはつぶやいた。エレン・グリーンもその日は、話をしたがらなかった。彼女はただ、ぶつくさ小言ばかり言っていたが、そんなときは、心になにか心配ごとがある時なのだ。

昨夜、台所で医者が彼女に低い声で話していたが、彼女はそのあとでぶつぶつこぼしていたし、エミリーに糖蜜をぬったパンを食べさせるときも、ぶつくさ言っていた。エミリーは糖蜜をぬっ

たパンが好きでなかったけれど、エレンのきげんをわるくしたくなかったので、それを食べた。寝る前に、エレンがエミリーに何か食べものをやるのは、めずらしいことで、エレンがそうするときには、なにかの加減で、とくべつにやさしくふるまいたいと思つてゐるときなのだった。

エミリーは、エレンの小言の発作がいつもとおなじようにあくる日はしずまつてゐるものだと安心してゐた。ところが、そうではなく、その日もエレンは全く話相手にならなかつた。もっとも、彼女はふだんでも大して話相手にはならなかつた。父のダグラス・スターはあるとき、かつと怒つて、エミリーに言つたことがある。「エレン・グリーンは肥つちよで、怠け者で、ほんとにしようのない老いぼれあまだ」それ以来、エミリーはエレンを見るたびに、この批評がまつたくびつたりだと思ふのだった。

そんなわけで、エミリーは、みすばらしいが坐り心地のよい古びた安楽椅子に、ちんまりと坐つて、午後はずつと『天路歷程』（英国人バンヤンの書いた宗教小説）を読んでゐた。エミリーは『天路歷程』が好きだった。幾度となく、彼女はクリスチャンやクリスチアナと一緒に、真つ直ぐなせまい道を歩いた——もつとも、クリスチアナの冒険は、クリスチャンの冒険の半分ほど、好きでなかつた。それは、クリスチアナのまわりには、いつも四五人の人間がいたからだ。悔悟の谷で悪魔アポリオンと、たったひとりでめぐりあつた、あの孤独で大胆なクリスチャンの半分の魅力も、クリスチアナにはなかつた。つれの仲間がおおぜいゐるのだったら、闇も妖怪もたいしたことはない。けれども、『たったひとりでは——』と、エミリーは考えるたびに胸のときどきするような恐ろしさに身ぶるゐをした。

夕食ができたことをエレンが知らせにくると、ダグラス・スターはエミリーに、行つて食べて

くるように言いつけた。

「わしは今夜はなにもほしくない。ここに寝て休んでよう。小妖精^{エルフキン}や、お前が戻ってきたら、みっしり話をしようね」

と言ってエミリーにっこりほおえんだ。そのほおえみはいかにも老人らしく、美しかったうえに、エミリーの心にしみいるような愛情がこもっていた。そのため、あまりおいしくもない夕食だったが、しあわせな気持で食べることができた。パンはしめっぽかったし、卵はなま煮えだった。でも、ふしぎなことに今日は、ソーシー・ソールとマイクを両脇にすわらせていても、おこられなかった。エミリーがこの二匹の猫にバタつきパンをほんのぽちり食べさせたとき、エレンが小言を言ったただけだった。

マイクは愛くるしい器用なしかたで、お尻をついてちんちんをし、前足でパンのかけらを受けとめるのだった。ソーシー・ソールは自分の番を待ちくたびれて、エミリーの足首にまるで人間のようにさわった。エミリーは両方とも好きなことは好きだったけれど、マイクのほうが彼女のお気に入りだった。マイクは濃い灰色をした器量のよい猫で、ふくろうのように大きな目をしていて、からだがしなやかでふとっており、毛並は柔かだった。ソールはいつもやせっぽちだった。どんなにご馳走を食べても、ソールの骨には肉がつかないのだった。エミリーはソールが好きだったけれど、ソールがやせこけているものだから、抱きあげてやったり、なでてやる気には、一度もなれなかった。ソーシーのほうにはなにかしらふしぎな美しさがあって、それがエミリーの心を惹くのだった。ソーシーは白と灰色のぶち猫で、毛並はとても白くつやつやしていて、顔は細長くとがっており、耳は長く、目はたいへん濃い緑色をしていた。彼女は恐ろしいほどけん

かが強いので、よその猫などは一勝負で逃げていってしまふのだった。こわいもの知らずのこの小さな短気者は、犬にまでおそいかかって、完全にまかしてしまふことがよくあった。

エミリーは二匹の猫が好きだった。彼女は自分の手でこの二匹を育てあげたのをとても自慢にしていた。まだ子猫の時に、日曜学校の先生からもらったのだった。

「生きもののプレゼントってすてきね」と彼女はエレンに言った。「だって、生きものって、だんだんきれいになって行くんですもの」けれども、ソーシー・ソールが子猫を生まないで、エミリーはたいへん心配した。

「ソーシーはどうして子猫を生まないんでしょう？」と彼女はエレン・グリーンに泣き言を言うのだった。「たいていの猫は、自分でどうしていいかわからないくらい、たくさん子猫を生むのにねえ」

夕食をすますと、エミリーは居間にもどっていったが、父は眠りこんでいた。彼女はそのことを非常に喜んだ。父が二晩も、あまりよく眠っていないことを知っていたからだ。けれども例の『みっしり』話ができないので、少しがっかりした。父と『みっしり』話をするのは、どんなときでも嬉しいことだった。けれども、それについて楽しいのは散歩をすることだった。早春の灰色がかった夕暮れどき、たったひとりで散歩をすることだった。彼女が散歩にでるのは、ずいぶんしばらくぶりのことだった。

「ずきんをかぶっていきなさい。雨が降りだしたら、必らずかけてもどってくるんですよ」とエレンが注意した。「あんたは、ほかの子供たちとはちがって寒さにはひどく弱いんだからね」

「どうしてあたしはそんなに弱いのか」エミリーは怒ってききかえした。（ほかの子供たちが『寒

さに弱くないのに」どうしてあたしにだけはそうでないのかしら。そんなの、不公平だわ」

しかしエレンは小言を言うばかりだった。エミリーは声には出さなかったが、「この肥っちょの、しょうのない老いぼれあまめ」とつぶやいてせめてもの腹いせにした。ずきんを取りに二階へ上がった――が、ずきんをかぶらないで走りまわる方が、好きだったから、しぶしぶ色のさめた青いずきんを、つややかな黒髪の長いおさげの上にかぶり、小さな鏡をのぞきこみ、映っている自分の顔にむかって親しげにほおえんだ。ほおえみは唇の両はしから始まって、ゆるい微妙な、ふしぎなうごきで顔じゅうにひろがっていった。ダグラス・スターはそれを見るたびに「亡くなった彼女の母親のほおえみそっくりだ」と考えた。彼がジュリエット・マレーにはじめて会ったとき、そのほおえみは彼の心をしっかりとらえて、いつまでも離さなかったのだ。それはエミリーが母親から受けついただたった一つの肉体のうえの遺産のようにみえた。彼の考えでは、エミリーはその他の点ではすべて、スター家の人々に似ていた。大きな紫がかった灰色の目、非常に長い睫毛や黒い眉、広く白い額（少し広すぎてきりょうをこわした）、まっさおで卵形の顔や敏感な口元などの繊細な造り、小さな耳がほんの少しとがっている。彼女が妖精の国の種族につながりがあることを語っているようであった。

「あたし、風のおばさんと散歩にいつてくるわね」とエミリーは言った。「あんたもいっしょに連れていけるといいんだけどなあ。でも、あんたがこの部屋からでることって、あるかしら。風のおばさんは、今夜、野原にでてるはずなの。おばさんは背が高くて、霧に包まれていて、グレイの薄い絹の服を、いつもからだのまわりにふわふわさせているのよ。それからこうもりみたいな羽をもっているわ。お星さまみたいにきらきら光る目が、長いふさふさした髪の毛のあいだか

ら覗いているの。お婆さんは飛べるのよ。でも今夜は、あたしといっしょに野原じゅうを歩き回るんでしよう。お婆さんはあたしの大の仲好しなの。あたし六つのときから知り合いなのよ。古い、古いお友だちだわ。でも、あんたとあたしはもっと古い友だちだわね、鏡の中の小さなエミリーちゃん。だって、あたしたちはいつうもお友だちだったんですもの、ねえ、そうじゃなくって？」

鏡の中の小さなエミリーに投げキスをする、鏡の外のエミリーはでかけていった。

風のお婆さんは戸の外で彼女を待っていた。風のお婆さんは、居間の窓の下の花壇に生えている縞模様の草の小さな葉末をゆらめかし、《アダムとイブ》の大枝をざわめかせ、霧に包まれた樺の木立の緑色の梢のあいだでささやき、家の裏手にある松の木のおんどりさんをじらしていた。この松の木はとても大きなおんどりそっくりの形で、大きなふさふさしたしっぽをしており、頭は今にも鳴き声をあげるかと思うように、うしろにそらしていた。

散歩にでたのは久しぶりだったから、エミリーは嬉しくて夢中だった。冬の間はひどく空が荒れていたうえに、雪が深かったから、一度も外にだしてもらえなかった。四月は雨と風の一カ月だった。だから、この五月の夕べには、彼女はまるでやっとときはなされた囚人のような気持ちだった。どこにいかしら？ 小川へおりて見ようかしら。それとも野原の向うのえぞ松のやせ地へいかしら？ エミリーはやせ地をえらんだ。

長いだらだら坂の草原のはずれにあるえぞ松のやせ地が、彼女は好きだった。そこで魔法が行われたからだ。そこにいると彼女は、他のどこにいたときよりも、ずっと楽しい気持ちになるのだ。芝草の生えた野原をすべるように進んで行くエミリーを見ても、誰も羨ましいとは思わなかったかもしれない。彼女はからだ小さく、顔の色は青ざめていたし、そまつな服を着ていた。